未来が聴こえる

１

――初めまして。私は岡島靖というものです。一人暮らしをしてます会社員です。一月ほど前こちらに転居してきましてまだ親しい友達もいなくて、誰に相談しようかと迷っていましたが、貴社の人生相談のコーナーがふと目に留まりました。

　ただこのコーナーに相応しい相談とは言えないかも知れないのですが話を聞いてもらえれば有難いです。

　相談と言うのは信じてもらえないかも知れませんが、或いは悪戯だと思われるかも知れないのですが“押しかけ女房”ならぬ“押しかけ宇宙人”の事なのです。こうに書き出した事で呆れられて読むのをよしてしまうかも知れないですね。でも宜しかったら騙されたと思って最後まで読んでもらえれば嬉しいです。

　“彼女”が来たのは半月ほど前なのです。会社から帰宅してドアの鍵を開けようとしていたところ、突然現れたのです。何かの勧誘の人かと思ったので「今、忙しいので」と言ってそのまま玄関に入ろうとしました。ところが“彼女”は何を思ったのか当たり前のように自分の後をついて玄関に入って来てしまいました。

　ビックリしたのと、呆れたのとで彼女を暫し見てしまいました。すると自分でもよく分からないのですが、急に親しみを覚え何故か家に上がって行くように言ってしまいました。

別に一目ぼれとかではないのですが、彼女の目を見ていたら急に気持ちが変わってしまったのです。

　そして彼女との変な同居が始まりました。彼女はこちらの言う言葉は分かっているようなのですが、言葉では話してくれないのです。言葉みたいのは“ビューン”とか“ピー”とかくらいですが、彼女の考えが直接自分の脳へ伝わってくる感じなのです。

　食事などは“何でも”食べられます。１日１食でいいようなのですが食べる量が凄いです。それに食品トレーまで美味しそうに食べてしまいます！まあゴミが出なくて良いのですが・・・。

　相談の本題に入らせてもらいます。それは“彼女”の“超能力”の事なのです。“宇宙人”

だからなのでしょうが・・・。と言うのは“電波による情報”をキャッチしてしまう様なのです。テレビ、ラジオ、携帯電話、メール等。

　それらの情報を私の脳に送り込んで来てしまうのです。もうありとあらゆる訳の分からない情報が次々に私に転送されて来てしまい、一時は混乱してしまいました。それでノイローゼ一歩手前まで行きかけました。今は脳もやや慣れたのかどんどん情報を捨ててくれてる感じです。

　これらの情報を使って一勝負かければいいのでしょうが、私にはそんな度胸はありません。でもこれってうまく使えば有益な事が出来るのも分かります。それでこんな重大な運命にさしかかっている私はどうに対処したらいいのか自分では判断がつかなくなっていまして・・・。

　上手く話が伝わったでしょうか。もっとも伝わる伝わらない以前に内容が内容なので信じてもらえないかも知れませんしね。でも今の状態は本当に書いた通りなのです。何卒宜しくお願いいたします――。

　読み終えた人生相談編集担当の今井由紀はフーっと小さな溜息を漏らした。“押しかけ宇宙人”なんて俄かには信じられない。また読者の悪戯かと思った。そしてまたゴミ箱行きかと思ったが、もし万一本当だったら大スクープになるような内容なので他の人にも読んでもらおうと思った。取り敢えず同僚の大石豪さんに手紙を渡して読んでもらった。

　大石さんはコーヒーを飲みながら、ニヤッとしたり首を傾げたりしながら読んでいた。が、読み終わってかなり神妙な顔で由紀に話しかけてきた。

「悪戯かもしれないけれど、返事の仕様がないので駄目元で取材してみるのも面白いかもなあ・・・」と、ポツリと言った。

「えっ！？取材・・・」まあそんなに遠くない町だから行けるだろうけど、つい口ごもっってしまった。

「新聞記者なんだから足で稼がなくちゃあ」と、大石さんは真顔で言った。

「でもこんな内容の取材なんて上司の許可が出ないんじゃあない？」

「理由なんてどうにでも付けられるだろう。君が嫌なら俺が行ってこようか」と、豪は意味深にニヤリとした。

２

靖と“彼女”とのおかしな同居生活は続いていた。新聞社の人生相談コーナーに手紙を出してはみたものの期待してはいなかった。こんな荒唐無稽な話をまともに取り上げてくれるわけも無いだろうと、半分諦めていた。

　２人の生活も何故か馴染んできた感じすらする。自分の脳細胞も適応を始めたようで彼女から送られてくる情報を上手くコントロールしてきていた。取捨選択を反射的にしてるようで、強い記憶として残るのは数十項目くらいになってる。

　また食費はかなり掛かるが、ゴミが殆ど出ないので凄い助かる。ゴミ出しは月に１回で済む。資源の有効利用をしてるようで何かエコ生活してると錯覚すらする。

　大分生活が落ち着いてくると、新聞社へ手紙を出したのは早まったかと思った。彼女からの情報を上手く使えばトテツモナイ仕事も出来るのがじわじわと分かってきた。政治・経済・芸能あらゆる情報が手に入ってきてるのだ。次第次第にその現実の凄さを実感し始めていた。

　しがない会社員の自分の小ささが逆に際立ってきた。手にしているお宝のような情報を独り占めすれば途方も無いお金が舞い込んでくるだろう。そう言うことが徐々に気付いてきた。まあ最初から気付いてはいたが、恐かったのと頭が混乱していたのとでつい誰かに相談したくなって手紙を書いたのだった。

　でも新聞社へ投稿したがまず悪戯だろうと思われ、取り扱ってくれないだろうと考えていた。靖は今、人生の成功者への階段を登り始めた思いに武者震いする思いがした。信じられないようなこの転機に世界を征服したような気までして来ていた。気の小さい自分を忘れたいのかも知れないが・・・。

　と、そんな時思わぬ来客があった。なんと新聞社の人生相談編集担当の者だと名乗った。

「どうも初めまして、今井由紀と言うものです」と名刺を差し出した。

「あっ、どうも。初めまして、岡島靖です」と、どぎまぎしながら開けたドアから少し出て答えた。

「あの、お手紙を読みまして興味を持ちましたので突然ですが取材に伺いました」

「あ、そうですか・・・」と言いながら背中でドアをゆっくり閉めた。

「お電話してからと思ったのですが、固定電話は無いようでしたので直接お伺いさせてもらいました」

「そうですか、まさか来て下さるとは思っていなかったので手紙に住所しか書きませんでした」靖は相談の答えは紙上か手紙で連絡してくれると思っていた。

「いえいえ、近くに他の用件もありましたので突然でしたが伺わせてもらいました。すみません、土曜のお休みのところ」

「いえ大丈夫ですよ、別に急用が有るわけでも無いので」ただ中には入れないようにしようとは考えていた。彼女の存在をまだあからさまにしたくないと思っていた。手紙を出したのと矛盾してしまうが。どう対応して上手く帰ってもらえるか考え始めていた。

「あの、早速ですがお手紙に書いてあった“押しかけ宇宙人”さんの事なんですが、少しお話を伺ってもいいですか」と、由紀は靖の肩越しにドアを見て言った。

「あ、ええ、まあどうぞ・・・」と、つくづく手紙を書いたことをしくじったと思った。

「では、その宇宙人さんは今もいらっしゃるのですか？」

「いるにはいるのですが、時折どこかへ出掛けちゃうんみたいで今は留守です」

靖の頭に彼女からの“言葉”がやって来てそのまま喋った。

「ふーん、そうなんですか。外へ出歩くのですか。じゃあ普通の人間という感じなんですね」

「ええ、そうです」

「お会いしてみたいのですが、いつ頃戻られますか？」

「それは全く分かりません。なにせ突然やって来てまた突然どこかへ行ってしまうので」

靖は考える事も無くすらすら返答ができた。

「では話を変えますが、手紙をくれたように悩まれているとの事ですが今はどうですか？」

「スミマセン、手紙を書いた時はほんと混乱していて誰かに話したかったのです。でも今は大分落ち着いて普通に会社にも行けてます」

「そうですか、良かったですね。では、その宇宙人による“電波の情報”を脳に送り込まれているとの事ですがその辺はどうですか」由紀は次第に核心に近付こうとしていた。

「あ、その事ですか。それはカルチャーショックではないですが、頭が混乱していて今考えるとノイローゼ一歩手前のような状態で幻聴だったようです。スミマセン大袈裟に書いてしまって、お騒がせしました・・・」靖は心の底から詫びるように深く頭を下げた。

話を聞いていた由紀は肩透かしを食ったような気持ちになっていた。

「そうだったんですか・・・」と言いながら、“宇宙人”というのも作り話ではと考え始めていた。

「スミマセン、折角来てもらったのに相談するような話題が無くなってしまって」

「いえいえ、宇宙人が本当にいるならそれだけでスクープです」と、一応言った。

由紀は靖の目を見ながら探りを入れる思いで喋った。が、靖が目を伏せてしまったのでどうも“宇宙人”もガセネタだと思った。とんだ無駄足だったと感じていた。また読者の投稿に踊らされてしまった。“人生相談”からスクープなど取れるわけも無いのに、同僚の豪さんが意味深に話してきたのでつい乗ってしまった。由紀はここにこれ以上いても虚言癖の相手をするようなものなので、一応礼を言って早々に岡島靖さん宅を辞した。